

近世後期の薬種商の活動

——土浦藩領色川家の記録から——

長 田 直 子

要旨 本稿は、近世後期の土浦の薬種商色川家の記録を手掛かりに、地方の薬種商がどのような薬種を仕入れ活動したか、又、政治・社会状況が大きく揺れ動いていたこの時期に薬種商がどのように行動したのか等、その実態の一端を明らかにしたものである。

江戸時代は、日本の医学・医療が発達した時代である。日本で独自化した東洋医学「漢方医学」に複数の流派が誕生する一方、十八世紀半ば以降は「蘭方医学」も発達し、両医学が共存した。そして、都市のみならず、地方の農村部でも医学塾などで修行した医師が活動していた。医師が医療活動を行う為には薬種が必要であり、都市・農村共に薬種商がいたはずである。しかし、個々レベルの薬種商に関する具体的な研究は、史料的問題によりほとんどなく、その実態は不明なことが多い。

色川家は、土浦城下（現、茨城県土浦市）で十八世紀中頃から幕末期にかけて薬種商を営んだ家である。色川家九代目の三中は、地域の学者として有名であるが、家業の薬種商としても活躍し、その弟美年ともに家業を成長させていった。色川家には、多様かつ膨大な文書がある。三中・美年が書き綴った日記「家事志」「家事記」を始め、取り扱い薬種の帳面等から、当時の薬種商の実態についても窺える。本稿では、色川家が複数の江戸の薬種商から薬種を仕入れ、江戸の大店薬種商と同等の多様な漢方薬・蘭方薬などを扱っていたことを分析、明らかにした。

又、本稿では、天保改革期、幕末期の異国船来航時の二例から、時の政治・社会状況に大きく影響されてゆく薬種商の姿も示した。そこからは、天保改革時に藩による物価引下げ政策の中で薬種商達が薬種値段引下に対応してゆく面、異国船渡来の影響による薬種の不足と薬種高騰・下落の中で薬種確保に奔走する商人の姿が見られた。

近世後期から幕末期にかけての地域の薬種商は、医師の医療を支え医療の一端を担う重要な立場であるとともに、時の政治・社会状況に左右される商人という、両面を持ち合わせる存在だったのである。

キーワード…近世後期、薬種商、色川家

はじめに

江戸時代は、全国的に統一された医師法・薬事法等のない時代である。明治時代初期に「医制」という医療制度が出来上がる以前の日本では、「医療」の定義はあいまいであり、医師の治療はもとより、薬店や薬売りの薬・配置薬、民間薬、寺社・宗教者による祈祷等まで、現代よりも広い意味での医療が展開されていた⁽¹⁾。

近世医療史の中の薬種商の研究は、薬種業の中心地である大阪道修町の研究、富山の薬売りなどの組織化された売薬商人の研究などがある一方⁽²⁾、個々レベルの薬種商に関する具体的な実態研究は、都市・地方共にほとんどない。その為、薬種商が具体的にどのような薬を扱っていたのか、活動状況、時代状況によって政治・社会的な影響を受けていたのかなど、基礎的な状況すら不明である。その背景の一つとして、薬種商の史料自体が少なく、残されていないことが挙げられる。

しかし、江戸時代は、日本で独自化した東洋医学「漢方医学」に複数の流派が誕生する一方、十八世紀半ば以降は『解体新書』に代表される「蘭方医学」も発達し、両医学が共存した時代である。大都市江戸・京都・大坂や、

当時の医学の先進地長崎を始めとする地域では多くの医学塾・蘭学塾が開学され、そこで学んだ医師達が故郷で弟子を養成してゆく。そのようにして、都市のみならず村落部にまで西医学が広まり、折衷し、人々に享受されていった。医師達が医療活動を行うには、薬種が必要であり、医師に薬種を提供する「薬種商」は、都市・地方共に存在していたはずである。薬種商人達は、医療の一端を担う医療者であると同時に商人でもあった。薬種商は、どのような薬種を調達し、得意先の医師達に販売していたのか。又、社会情勢が大きく移り変わる近世後期から幕末期にかけて、どのような動きをしていたのか。

本稿では、近世後期から幕末期にかけて、常陸国土浦藩領田宿町（現、茨城県土浦市）で薬種業を営んだ色川家を取り上げ、家の日記「家事志」「家事記」を中心とする色川家文書から、「薬種」調達の面に焦点を当てて、地域の薬種商の活動の一端を明らかにする。

（一）色川家と色川三中・美年について

色川家は、紀伊国牟婁郡色川村（現、和歌山県）から、十七世紀初頭から半ば頃に土浦に土着した家である。色川家については、中井信彦氏『色川三中の研究』（伝記編・学問と思想編）を始め、土浦市立博物館で開催された特別展示「次の世を読みとく―色川三中と幕末の常総」（二〇一五年）、色川家の日記「家事志」「家事記」の解題や色川家の史料目録等によって詳細に記されている。筆者も拙稿で触れているため、ここでは以上の研究から、本稿に関わることのみ概略する³⁾。

色川家が薬種商を営み始めた時期は正確には分からないが、元禄期頃に遡るようであり、享保期（一七一六―一七三六）頃には既に江戸と取引をしていたようである。その後、醤油醸造業にも携わり、寛政四（一七九二）年頃には、江戸城西の丸御用となった。本稿で取り上げる時期は、色川家の日記「家事志」「家事記」が記された文政九

(一八二六)年〜安政五(一八五八)年である。当時の色川家は、色川家九代目の三中(一八〇一〜一八五五)とその弟美年(一八一四〜六二)の時であり、色川家の薬種店が経営難から再興し、醤油醸造業としても栄えた時期であった。

色川三中(以下、三中とする)は、家業の薬種商を継ぐ傍ら、国学・度量衡の研究・本草書の『大同類聚方』の校合等多様な研究を行い、地域の国学・本草学者等、多面的な側面を持つ人物として有名である。薬種商としての三中は、十代前半の文化十(一八一三)年から、江戸の薬種商「大坂屋平六」の店で修行し脚気を病んで二年後に帰郷した。大坂屋は、江戸の十組問屋に所属する、薬品会(薬品の品評会のようなもの)も行う大店であった。色川三中の大坂屋での修行は、短期間であったが、そこでの知識は後述の通り、薬種商としての活動にも活かされたようである。後に述べるように、日々薬種商として活動する傍ら、出掛ける先々で、本草の元となる薬種を収集し、半夏などの薬種を育て、店で薬品会を催すこともあった。

三中が土浦に帰った当時、色川家は薬種店の経営が思わしくなかったが、翌年には土浦の大火によって店が全焼してしまふ。その中で店を手伝い二十代後半には家を継ぎ、経営再建に奔走してゆく。弟美年も文政八(一八二五)年、江戸元飯田町の薬種商「小松屋三右衛門」での奉公ののち、兄と共に薬種商経営してゆくことになる。経営が軌道に乗ると、三中は祖父の跡を継ぎ醤油醸造業へ、薬種店は天保期に数年をかけて美年に譲っていった。この二人によって、文政九(一八二六)年から安政五(一八五八)年にわたる約三十年書き継がれた日記が「家事志」「家事記」全二十六冊である。この両記録は、日記である為、日々の生活・人々との交流・社会情勢と共に、色川家の薬種商としての記録でもあり、その内容は具体的かつ詳細である。また、色川家には多数の薬種関係文書が残されているため、それらを合わせて薬種商としての活動実態を見てゆこう。なお、「家事志」「家事記」は三中・美年の書き手により名称が異なるが、形式は同じであり、内容的にも連続するため、本稿では「家事志」に統一する。

(二) 色川家が扱った薬 — 入手ルートと扱った薬

① 色川家の薬種入手先について

色川家では、実際にどのような薬種を手に入れ販売していたのか。「家事志」が書かれた時期は、漢方医学の広がりとともに蘭学塾なども出来、漢方・蘭方医学ともに村落部にまで徐々に広まる医学的發展の時期である。日本でも漢蘭ともに多くの医学書・薬方書が発行され、それらには、現代の法律で決められている種類以上の薬種を使用した薬方が記されている。そして、これらの書物は、医師・医療従事者達によって学ばれ、医療活動に反映された。つまり、多くの薬種が求められた時代であった。

薬種は、国産のものもあったが、多くは中国・朝鮮半島産の漢方薬種・蘭方薬など輸入品に頼っていた。輸入品の薬種は、まず、当時の交易地である長崎に到着する。そして大坂の唐薬種問屋に集められ、道修町の薬種屋仲間により目方・品質の検査を経て価格が決められた後、江戸や京都を始めとする全国の薬種商へと運ばれていった。土浦の色川家の場合、主な取引先は江戸の薬種商が集まる日本橋の店々であった。「家事志」全冊から色川家が取引した江戸の薬種商を見ると、色川家の修行先であり、伝馬町十組問屋の一つ江戸橋町の大店大坂屋平六を始め、近江屋小兵衛・三河屋善兵衛・片田屋幾右衛門・富田屋善兵衛・美濃屋吉兵衛等の江戸の十組問屋・薬種諸国積下所に属する大店から、店の規模は不明な伊勢屋平八・和泉屋吉右衛門・大枝清兵衛・大和屋平八等、大小十もこの店がある。色川家がこれらの店に発注した薬種は、海路・陸路を使って色川家に届けられた。そして、色川家とこれらの店では薬種の注文・支払いといった取引のみならず、日常的に交流を持ち、情報交換し、時には経営を支援合っていた。

もっとも、これらの店は全て同じ時期に出てくるわけではない。「家事志」が記された約三十年間には、頻繁に起

こる江戸の火災による店の消失・損害、薬種を大坂から江戸へ海路で運ぶ途中での船の遭難による莫大な損失、店の経営の失敗などで店が潰れ・縮小・傾き、中には日本橋を去っていった店もある。一方、新規出店、経営が発展する店もあるなど、栄枯盛衰があり、時期によって取引先は変わった⁴⁾。例えば、一八二〇年代の文政期頃には、大坂屋平六・近江屋小兵衛・伊勢屋平八・和泉屋吉右衛門・大枝清兵衛との取引が見られるが、天保期（一八三〇～四〇年代中頃）には上記の商人に加え、片田屋幾右衛門・富田屋善兵衛・美濃屋吉兵衛などが加わり、片田屋・富田屋が色川家の大きな取引先となつてゆく。一方で、天保期には大坂屋の経営が傾き、天保十年には日本橋橋町から本所亀沢町へと転居してゆく。三河屋善兵衛も大火などにより潰れるも同然になり、奉公人大和屋平八が店の物を譲り受け色川家との取引を願う記録もある。更に、嘉永期・安政期（一八五〇年代頃）には色川家の取引先のメインは、大坂屋や近江屋から片田屋に取つて代わられてゆく。このような時期的変化がある⁵⁾。

② 色川家が販売した薬

・薬種（生薬）

色川家では、どのような薬種を扱ったのか。先に述べたように、江戸時代の地域の薬種商が取り扱っていた具体的な薬種内容を紹介する研究は非常に少ない為、ここでは色川家が扱った薬種の具体例を紹介しよう。「家事志」では、しばしば薬種の書付や、江戸からの調達の記載が見られる。

まず、文政期の例を見よう。文政十一（一八二六）年六月の記事の後ろに記された薬種の書付には、「吉更（桔梗）・柴胡・角葛根・竹節（竹節人参）・猪苓・防風・川芎・皮付山キ菜・唐木香・唐大黃・甘草・麻黄・海人草・土佐根皮・半夏・水犀・一角・麝香・広東（広東人参）・東圭枝・大丁子・竜腦・朝黄芩・大々甘遂・輕粉・尾張真珠・大辰砂・蘇木・水銀」の書付がある⁶⁾。又、「家事志」本文中にも、これ以外に阿煎薬・黄耆・我朮・乾姜・

山査子・サフラン・石膏・蒼朮・大棗を始めとする多様な薬種が見える。これらは漢方薬・蘭方薬に頻繁に用いられる薬種が多い。しかし、色川家が扱った薬種はこれのみではない(7)。

次に、色川家の薬種の帳面を見よう。表一は、幕末期の安政元(一八五四)年三月色川家の「薬名集」に記された薬種を表化したもの、史料一はこの帳面の巻末の記載である(8)。

史料一

口上

右之通荒増通用之薬種御記候、御注文之物有之候得者、多少ニ不限御用被仰付下度、直段等別而相勤差上可申候間、卒偏ニ奉希上候

寅 三月

色川薬店

御医師方様

上記のように、「御医師方様」とあり、医師に販売するための薬種を記したリストである。この帳面には、薬種と共に、五種香・砂糖類・砂糖漬・金平糖・染草類・絵具の記載もあり、薬種以外にも多様な物を扱っていたことがわかるが、表一では、薬種部分のみを取り上げた。実際の「薬名集」は、イロハ順の項目別に縦書きで一行ずつ各薬種を記したものであるが、表では便宜上横書きでまとめた。薬種の順番はそのままである。ここから、色川家では四一〇以上の薬種(同類の地域・名称別のはまとめてあるため、実際には五百以上の薬種がある)を取り扱っていることが分かる。内容も、先の文政期の薬種の書上に記されている葛根・桂枝・大黄・半夏・甘草などの

表1 色川家「薬名集」の薬（安政元年3月 イロハ順）

薬 種 名											
イ	郁李仁	淫羊藿	茵陳	一角							
ロ	鹿胎子	鹿角膠	蘆瀉	緑青							
ハ	貝母（同真）	白蛇	巴豆	白鮮皮	白桃花	白頭翁	麦芽	白鳥香	白扁豆	白蠟	半夏
	薄荷	麦門冬	反鼻	破胡紙	栝子仁	巴戟	ハアレム	馬兜鈴	馬勃	梅仁	
ニ	朝鮮大人参（廣東/先折/御種/直根/信濃/髭/同竹節）					東肉桂	玉乳香	肉豆蔻（同古渡）	ニクリ皮	肉蓯蓉	
	魚ニベ（同鹿/同京）	人中黄	人中白	忍冬	仁石	ニカハ	（千本/三千本/次/廣膠）				
ホ	唐芒硝（同和）	蓬砂	防風（瀆真）	ホルトカル	防已（同和）	吉益牡蛎（同鼠）	蒲黃	牡丹皮			
	虻蟲	茅根	ホウトル								
ヘ	片腦	髓甲	鼈膏	ペボウ							
ト	杜仲	當歸（唐・大和）	桃仁	冬瓜子	獨活	兔絲子	土龍	ドロシス	杜松子	冬葵子	
チ	丁子（同母）	沉香（真盤/刻）	地黄（同熟）	猪苓（同真）	陳皮	地骨皮	地榆				
	知母（同真）	チヤン（紅毛/唐）	猪牙皂	丁香皮	竹茹	竹葉	猪膽				
リ	龍腦（白手/唐口/紅毛）	竜骨（小豆蔦）	竜眼肉	竜膽	良姜	藜蘆	劉寄奴	龍涎香	留柏		
	ルザラン										
ヲ	日光黄連（加賀/仙臺/松葉/製法）	黄芩（朝セン/真）	黄耆（朝セン/真）								
	ヲニシハリ	黄柏	黄精	雄黄	ヲクリ	甘キリ	遠志				
ワ	王不 <small>留</small> 行	若根	蕨粉	和ザラシ							
カ	甘草（同和）	甘遂	厚朴（サツマ/和）	香附子	海人巾	菝葜	干姜	葛根（同板）	甘松		
	何首烏	訶子	寒水石	夏枯草	片クリ	甲香	カナヲル	葛粉	葛花	干漆（同岩）	藁本
	海桐皮	橄欖	海金沙	鹿ノ油							
ヨ	薏苡仁	與印	陽起石								
タ	唐大黃（同和）	大棗	大楓子（同油）	大腹皮	澤瀉	丹礬	大戟（紫女和）	代赤石			
	丹（長吉/勝吉/市兵衛）	獾肝	ダイタイ								
レ	連翹	連肉	連葉	連花	荔枝核	羚羊角	零陵香	連蕊			
ソ	蒼朮（同新立/同種/同和）	草蓂	皂角子（同刺）	皂莢	桑白皮（同セイ）	續斷	續隨子	側豆			
	側柏葉	ソツヒル	蒼耳子	桑寄生	草決明（同子）	桑螵蛸	蘇香油				
ツ	津蟹	頭甫糖									
ナ	刀豆	南天實									
ラ	蠟石（日光）	雷丸	亂髮								
ム	無名異	梅剝	村立巾								
ウ	烏藥	大茴香（同小）	禹餘糧	鬱金	烏蛇	烏賊	烏梅	雲母	烏頭（同川）		
ノ	野菊	ノビル									
ク	唐 <small>薑</small> 香（青葉/同和）	滑石	苦辛	槐花	槐木皮	貫衆	苦楝皮	瓜呂仁（同根）			
	瓜蒂（越前）	鶴虱	□麦子（杞子/木）								

近世後期の薬種商の活動

		薬種名											
ヤ	山菌カ	益母草	夜明砂	柳ノ蟲	ヤマメ魚	ヤカラ魚	ヤツ目鱈						
マ	長麻黄(同セ井/五ア切/同真)	馬錢	麻仁	蔓荊子	松脂	玫瑰花	万貞廉	万陀羅花	滿那				
ケ	東桂支(同ハラ手/同紅毛/同跋趾)	根皮(同桂朴)	玄午子(同白)	輕粉(關東)	芫花(真/和)								
	玄參	芡實	雞頭花	荊芥	雞冠石(同末)	雞肝	雞油	桂心	芫青				
フ	大附子(白川)	丸茯苓(乱製)	伏龍肝	燕異仁	浮石	覆貧子	浮萍草	風藤					
コ	呉茱萸(同真)	胡升	五靈脂	牛黄	五味子	牛膝(同真)	紅華	琥珀(同和)	胡黃連				
	蛤蚧	牛膽	五階子	五八霜	五加皮	牻(膽肉骨皮眼頭)	殼精草	狐肝					
テ	天南星	天門冬	天瓜粉	天麻	天石	天竹黄	テリヤアカ	鐵粉	帝歷子(同苦)				
ア	阿片(津ガル)	阿煎薬(丸手/縮手/菊屋)	阿魏	安息香	玉阿膠(齒カ手/硯手)	赤華螺							
サ	サフラン	酸棗仁	山茱萸(同真)	山豆根	細辛	柴胡	山椒来(琉球/皮付/同十番皮)	山慈姑	犀角				
	三奈	蚕砂	三七草	山査子(同真)	三稜	山藥	山梔子	西国米	山椒魚				
キ	伽羅	龜板(同和)	羌活(同和)	枳實(同サツマ/同和)	枳壳(同サツマ/同和)								
	橘皮(同核)	桔梗	杏仁	金銀花	牛肉(同油/同藤)	菊花	蛻蝦	キナキナ	麒麟血				
	韭子												
ユ	熊膽(色々)	揄白皮	湯ノ花										
ミ	蜜(同同同同)	蜜蠟	蜜蒙花	蜜陀僧	身胃羅	磨砂							
シ	東縮砂(同伊豆)	瑣珠(同水戸/同尾張)	麝香(同白毛/同合山/同皮)	使君子	沙盆								
	辰砂(同水干)	紫壇	常山	鍾乳石	雌黄	砂參(同和)	芍薬(同生干/同真/同宇田/同赤/同信濃)						
	辛夷	神麴	四国米	紫苑	商陸	紫根	紫蘇(同子)	蒺藜子	赤石脂(古渡/同和)				
	蛇退皮	蛇床子	蛇骨	蛇含石	蛇木	蛇毒	紫石英	慈石	紫艸丈	紫河車	梓葉		
	藥カ芩(同種)	藥カ皮	車前子	樟腦	杼帝	紫藤香(このあと破損カ)							
エ	延胡索(同真)	エブリコ	猿膽										
ヒ	白芷(同和)	白豆冠	白附子	白薇	白朮(同和)	梶郎子	草發	百部根	白菱	白姜蚕			
	ヒカイ	草麻子	白檀	白芥子	百草								
モ	木香(同和/同真/同青)	木瓜(同真/同シドメ)	木通	沒藥	木賊	木天行	沒食子	木別子					
セ	川烏頭	川芎	川骨	川棟子	石解	前胡	穿山甲	石膏(同和)	蟬退	施覆花	升麻		
	消石	青箱子	青蒙石	青塩	青黛	青皮	センソ	全蠍	石櫛皮	石菖根	昌蒲根	青高	
	石韋	石決明	積雪艸	石燕									
ス	水銀	水蛭	杉脂	ズミ									

土浦市立博物館寄託色川徳治家文書83「薬名集」(安政元年3月)より作成。

「薬名集」のうち薬種の部分のみ(五種香・砂糖類・砂糖漬・金平糖/染草類の記載を除く)を記した。表中の薬種の漢字表記は、なるべく史料中の文字に基づいたが、異体字の一部は新字に直したのものもある。

表中の(カッコ書き)のものは、原史料では並列して書かれている。例えば「フ」欄の「大附子(白川)」は、「大附子」の横に「白川」とあり「白川附子」をさす。

なお、表中の薬種がイロハの欄に該当しないものもあるが、原本に書かれている場所に配置した。

漢方薬種がある一方、現代では使われる頻度の少ない藜蘆・神麴・葶發、蘭方医学で用いられる代表薬のサフランや解毒剤のテリヤアカ・キナキナ（アカネ科キナノキの樹皮、キニーネの原料）もある。又、現代では薬扱いとはならない民間薬的な湯ノ花・柳ノ虫・ヤマメ魚・山椒魚まで多様な薬種が載せられている。つまり、頻繁に用いられた漢方薬から蘭方薬、現代では用いられることの少ない薬種・民間薬的なものに至るまで、非常に多くの薬種を扱っていたことが分かる⁹⁾。なお、「家事志」本文中には、ここにはない薬種も記されており、実際にはより多くの薬種を扱っていた可能性がある。

色川家が扱った薬種の幅広さは、江戸の薬種商の取り扱い薬種を見てわかる。江戸の薬種商が販売していた薬についても、売薬を除いてはほぼその実態が不明であるが、国文学研究資料館所蔵の天保九（一八三八）年七月の江戸横山町近江屋小兵衛の「薬種相庭帳」がある為、これを参考にしよう¹⁰⁾。この家は、町名と店名、店の略称から、色川家と日頃取引のあった横山町二丁目の、伝馬町組唐和薬種十組問屋の近江屋小兵衛と同じ店と考えられる。この帳面に記された薬種は約三百種あり、紙面の都合上、帳面の記載全てを色川家の薬種と比較することは出来ないが、全体を通して見ると色川家と近江屋の薬種が重なるものも多い一方で、近江屋が扱っていない薬種もある。一例を挙げれば、冒頭の「イ」の欄では、近江屋は「郁李仁・淫羊藿・茵陳・一角」とあり、近江屋にあつて色川家にはない威靈仙・伊保田がある一方、色川家は「郁李仁・淫羊藿・茵陳・一角」とあり、近江屋には「小貝母（同御薬園）・白鮮皮・破胡子・栢子仁・巴戟・白蛇・実巴豆・麦門冬（同撰）・薄荷・半夏（同撰）・白扁豆」がある。一方、色川家は表中の「ハ」の欄の通り、二十二種の薬種があり、近江屋の薬種に加えて「白桃花・白頭翁・麦芽・白蠟・反鼻・ハアレム・馬兜鈴・馬勃・梅仁」など、近江屋より多くの薬種がある。近江屋と色川家の帳面の時期の差は十六年程あり、近江屋が扱う薬種も安政期には増えている可能性がある為、一概に色川家の方が取り扱い薬種は多かったとは言えない。しか

し、少なくとも、色川家では、江戸の薬種商並みかそれ以上の種類・品数の薬種を取り揃えていたことは窺える。なお、色川家では、天保七年六月二十二日には、富田屋に「富へ金八両為登、大黃注文遣ス」と、大黃の注文を出す一方、翌々日二十四日には「近小より仙台便にて官製御人參（官製の人參）届ク」と、近江屋から官製人參などを取り寄せており¹¹、薬種によって江戸の店を使い分けて注文・調達している様子が窺える。色川家では、半夏・紅花等も栽培しており、これらを加えて、江戸の大店並みの豊富な薬種を揃え販売していたのだろう。

・売薬

次に、色川家が扱った売薬についても簡単ではあるが、触れよう。江戸の薬種商は、薬種と共に店で売薬を製造・販売していたが、色川家でも元々、麻疹（はしか）の薬を製造販売するなどしており、右の天保十三（一八四二）年の記録にも売薬がいくつも見える。ここでは、はしかの薬はないものの、当時様々な薬店でも売られていた小児の薬の奇應丸や婦人薬の實母散などの著名な売薬がある。一方、医師の処方する葛根湯・圭し湯（桂枝湯のこと）¹²、大柴こ湯（大柴胡湯）なども多く見える。当時は医師と薬種商を分ける規則などはない時代の為、三中はその知識の多さから「家事志」の中で、時折これらの薬を調合、知り合いの患者などに投薬する記載もあり、医師同様の薬も調合・販売していた¹²。

表2 天保13年6月8日「覚」のなかの売薬

薬名		値段
一角丸	一粒につき	7文
寄応丸	同	4文
實母散	一ふくにつき	112文
薄か円	1匁のところ	100文
葛根湯	一ふくにつき	30文／22文
圭し湯	同	22文
大柴こ湯	同	30文／22文
小柴こ湯	同	22文
大小青竜湯	同	30文／22文
柴圭湯	1ふくにつき	22文
三黄湯	同	30文
正気散	同	30文／22文
五令散	同	30文／22文
枇杷葉湯	同	30文
吸毒散	同	20文
三和散	同	30文
四物湯	同	16文
五積散	同	22文
八ミ丸	百文〈目〉につき	17匁
六ミ丸	同	22匁
赤にし	1斤につき	44文
屠蘇	1ふくにつき	22文
	袋入	30文

土浦市立博物館寄託色川徳治家文書
「家事志」二十八より作成

③ 色川家から地域の顧客へと販売された薬

さて、色川家が仕入れた薬種は、地域の医師を中心とする顧客達に販売されてゆく。本稿は主に色川家の薬種に焦点を当てる為、色川家の地域での販売方法などにはあえて触れないが、「家事志」では、三中が薬種商としての色川家を再興してゆく中で、得意先を広げ、使用人を雇って西在・南在・北在・辰巳・大東・小東・山根・北条のグループに分けて薬種の販売・薬種代の掛け取り（回収）をし、経営拡大してゆく様子が描かれる¹³。ここでは、天保二（一八三一）年春に色川家から西在廻りの医師達に販売する為に、西在（西の担当）が持ち出した薬の覚を見よう。

史料二

辰春西在持出し物之覚(14)

- 一 羚羊角れいようかく壹本 一 鹿茸ろくじょう壹本 一 直根(直根人參) 壹斤 一 土契じんこう沈香 一 〈小豆〉 竜骨りゅうこつ八両 一 大綜キリン血
- 一 トリス 一 生々乳せいせいにく 一 アラヒヤコン(アラビアゴム) 一 雞冠石けいがんせき 一 唐琥珀 一 御種人參おたねにんじん四十八匁
- 同(御種人參) 細小半斤 一 上之犀角さいかく二本 目方九匁五分 一 一角二切 目方二匁三分 一 いせ珍珠上三分
- 一同(いせ珍珠) 下壹匁 一 蟻蠟あみろう壹両 一片熊胆ゆうたん九枚 一同上二枚 一 カナノヲル十三匁 一 猿胆えんたん三両
- 一 先折參(先折人參) 壹匁七分 一同上壹匁八分 一 沈香じんこう極上六両 一同(沈香) 中小半斤 一 犀犀角四両
- 一 上白広東百四匁 一同(白広東) 中六十六匁 一 上古立百十匁 一同極上(古立) 四十二匁 一中(古立) 百匁
- 一 上白犀角五十匁 一 唐龍骨 一 □□石(不明)三十二匁

薬種は、ほぼ全て表1にもある薬種である。ここでは、漢方薬・蘭方薬共に見えるが、葛根・桂枝・半夏・甘草など頻用される薬種というより、羚羊角・アラヒヤコン(アラビアゴム)・カナノヲル(血留石)などめづらしい薬種を持ち出していることが分かる。つまり、色川家では漢蘭多様な薬種を揃え、実際に珍しい薬種を含めて地域の得意先廻りに持ち出し、得意先の需要に応えようとしていたことが窺える。

(三) 時代の流れの中の薬種商の行動 — 天保の改革と異国船渡来

さて、以上、薬種商の活動を、主に薬種調達の面から見てきたが、次に視点を変えて、時代の流れの中の薬種商の行動を見てゆこう。薬種商達は、時代の政治・社会状況に影響されたのだろうか。結論から言えば、大きく影響されている。ここでは、天保の改革と、黒船来航時の二例から、薬種商の行動、および薬種の状況を見ていきたい。

① 天保の改革と、薬種の値下げ

天保期は、以前からの幕府財政悪化の上に、天候不順と不作が続き飢饉と一揆・打ちこわし等が頻発した時期である。その中で天保十二年～十四年（一八四一～四三）にかけて、老中・水野忠邦が主導した幕政改革 天保の改革が行われた。幕府は、財政の立て直しと物価抑制を行い、貨幣改鑄や儉約令、株仲間の解散、人返し令、上知令などの政策を行ってゆくが、この天保の改革は、薬種商の世界でも無縁ではなかった。

江戸では、天保十二年七月、江戸の薬種屋十三人が抜荷けに関わったとして獄屋に入れられた。その中には、當時色川家の大口の取引先であった富田屋もいるという情報が色川家に入った。富田屋自体は、その後事なきを得たが、この事件は、天保の改革の取り締まりの一環として起こったものであった。そして、遂に同年十二月には江戸の薬種問屋を含む十組問屋は、嘉永期に再興されるまで、解散となってしまう¹⁵。改革の影響は、土浦藩も同様であり、儉約の奨励や、華美になることに対しての取り締まりが行われた¹⁶。土浦藩の物価統制策により、様々な品物の値引きが、城下町の町人たちに仰せつけられた。それらは、小売物など（砂糖・松脂・わらびこ・石灰・蠟・紙等）の値引きが主であり、薬種に対しての規制ではなかったようである。しかし、土浦の薬種商たちは、複数回集まって薬種の値段の相談をしている。以下は、その一部である。

史料三(17)

天保十三年四月二八日

又手前へ大町万庄・中条町はし本両家まゐり、薬種書上帳へ相談之上値引取極、昼頃より夜分迄か、り候而夫々銘々二値引極申候（中略）直下ヶ之事ハ当時相場高下二か、ハらず逸々少しづ、之値引付候、明朝はし本二而相した、め差上候積、此上御上様之御下知を相待候事

土浦の薬種商達は、改革が始まる以前から薬種商仲間を組んでいたが⁽¹⁸⁾、この時にも薬種商同士で数度集まり相談した上で、土浦藩の趣意に従って薬種や売薬の値下げを決めて、主の御下知を待つことにした。そして、五月二十三日には、「中条はし本相談之上薬種相場引下候品々相改、今朝役元迄届置」として、「唐大黃三十四匁買三十七匁五分売」というように、唐大黃や甘草・唐黃芩・朝鮮黃芩・加賀黃連・古立蒼朮・東圭枝・連朮・猪苓・大茴香・益知のメて十一味の買値と売値を決めている。そして、六月八日には以下のように値下げの張り札を出した。

天保十三年六月八日

夕立大雨 四時より橋本同道にて万庄方へ参り、此度御趣意出候ニ付相談之上直下之張札出す、尤家方之分へも不入此度御趣意之事薬種屋何之御沙汰なし、尤諸商人共直段書上げ無之品一体ニ引下候様、被仰渡有之ニ付、薬種屋中談之上、右之如取計

以上のように、この御趣意は薬種屋については、何の沙汰もないことであった。しかし、諸商人共へ値段の書上げがない品物を引き下げようという仰せ渡しがあつた為、薬種屋中で相談したうえで、右のようにした、という。つまり、薬種屋達は、薬種そのものが直接儉約の対象とはなっていない中で状況に鑑み、薬種屋同士で相談して値下げを決める対応を取っていたと言える。尚、先に見た表2の売薬は、この記載中のものである。

② 黒船来航と大黃の価格上昇

次に、幕末期の黒船来航時の薬種商の行動を見たい。

嘉永六（一八五三）年から翌七年にかけての黒船来航は、日本の政治・社会に影響を与えたのみならず、海外からの薬種輸入に頼る薬種商の世界にも影響を与えた。色川三中の黒船来航への関心は高く、異国船の情報と意見・批判を『片葉雜記』という記録としてまとめている¹⁹。ここでは「大黄」をキーワードに、「家事志」の記載から、政治的出来事に影響される薬種商の動きを見てゆこう。

大黄は、タデ科の植物の根茎で、別名「將軍」とも言われる消炎・瀉下作用のある薬である。古代中国の薬方書『神農本草經』に記され、明時代の李時珍『本草綱目』等の本草学書（薬剤の元となる動植物・鉱物に関する学問）にも出ており、唐大黄・和大黄は、現代まで漢方薬・売薬の主要構成薬種の一つとしてよく用いられている。先の文政期の薬種書付や、表1にも唐大黄が見られるように、江戸時代にも頻繁に使われており、「家事志」「家事記」の中で、色川家はしばしば江戸の薬種商から調達している。

「家事志」によれば、色川家は嘉永六年六月七日には、浦賀表へ異国船四艘が来たといううわさを聞き、十日には実際にその情報を得ていた。そして、米の値段がにわかには引き上げられていること、六月十一日には異国船が退散した話が記されている。その時には、まだ薬種までは影響がなかったようであるが、翌年になると状況が変わってくる。

史料四⁽²⁰⁾

嘉永七年二月二日 雨

（前略）川口書生大久保一学江戸ヨリ帰る、此度浦賀辺相廻り処々見物致候様子、アメリカ一条先達而ヨリ風聞区々にて日々今ニも合戦ニ相成候由ノ巷説、夫ニ付て我等出府ヲ急候次第ハ、去丑ノ冬唐船入津弥欠年之処アメリカ一条旁海陸とも通用無之正月初旬ヨリ唐物業物何ニ不寄日々直段引上る、中ニも大黄ノ直段正月十日

頃ヨリ別段飛上り、当時百四十匁已上ノ様子、夫故仕入向取急キ今ノ内荷物引取候様ならてハ行々世上如何成り候哉も難計ニ付、廿日後直様出府ノ積俄ニ心懸候へ共、如前書異船区々ノ風聞ニて御府内之様子不相分候間一日送り二見合過候処、右一学ぬし帰而の話之様ニ而ハ多分和平ヲ謀候趣ニ而、火急ノ変もあるましき様子ニ決着致候間、弥出立ノ用意ニなる

色川家への異国船渡来の情報は、浦賀へ異国船見物に赴き江戸から帰宅した土浦の川口の大久保一学からもたらされた。話によれば、前年の冬、唐船の入津がなかったところへ、アメリカ船の一件が起り、海陸とも通用がなくなったこと、正月初旬より、唐物薬物すべて日々値段が引き上げられ、なかでも大黄の値段が正月十日ころから特別に跳ね上がり、当時百四十匁以上となったようであるとのことである。それ故仕入れを急いで、今のうちに荷物を引き取らなければ、ゆくゆく世間がどのようになるのかも計りがたいものであるし、異国船の騒ぎについて様々な風聞があり、御府内の様子がわからないがおそらく火急の変化もないようだという。そして、色川家では、実際に三日後の五日に江戸へ向けて出立、翌々六日の夕刻に到着している。つまり、ここでは、黒船来航を原因として大黄が入手困難となり、価格が上昇するという情報を得た直後に江戸へ赴く、迅速な商人の動きが見える。

大黄に関する薬種商の動きの記録は、これからしばらく続くが、以降は一部を原文引用しつつ、要約しよう²¹。江戸に出た色川家は、二月八日になると、「上方船入津無之、当時売買共不便利人氣おたやかならず、仕入物等甚難儀ニて候へき、大黃直段百六七十匁大差直也、正月中ヨリ帳合取引無之現金品引替也、「十(片田屋幾右衛門のこと)ニて、五斤^全八斤合十三斤出来、当時問屋ニて金子練合能者ハ、上方ヨリ現金ニて岡持ノ様子直々見之」と、上方船が江戸に入らず、仕入れに支障が出ていること、大黄の値段が上がってきていること、正月から現金での引替となったことが記され、片田屋などから大黄を十三斤分程調達している。そして、十四日以降、色川家から片田

屋に金子六十兩を渡す様子が記されている。価格が上がり始める中で大量に確保しようとする動きが窺える。

更に大黄の価格は高騰したようで、二十八日には色川家を訪れた富沢町の玉久手代の直蔵という人から、大坂表から来た状によれば唐物の相場が俄に引き立てられ、とりわけ大黄の値段が飛び上がり、櫃値段で二百二十匁だという情報を得た。色川家では、同日新領あたりの医者に頼まれて、大黄一斤分を売ったところ、代二百文を現金で受け取り、色川家では不思議に思っていたところ、店の者によれば、実際には江戸から買いに来たようである。大黄不足により江戸から買物に来た人がいることを知った色川家では、更なる大黄確保に走り、翌二十九日には店の使用人藤兵衛と与兵衛兩人を、水戸支藩の府中へ大黄を買いに遣わせた。更に、翌日の晦日、再び店の者を府中市中へ買いに行かせ、中一で先日申していた金額十五斤百四十匁で購入し、真壁で三斤、合計二十五斤。そのほか唐物麻黄・兵郎子・甘遂・阿仙薬・巴豆の類を集めて、八十兩余りのものを引き取った。江戸で買ったものと合わせて五十七斤となっている。このように大量の大黄確保に走る色川家であったが、この間、色川家へは、諸方より素人風の人が大黄を買いに来て、それらは皆江戸から来て土地の者を頼んで買っている様子であり、色川家ではそのことを心得ているため売らなかつたという。

このように、江戸での大黄不足とそれを求め奔走する江戸地方双方の人々の慌ただしい様子が窺えるが、価格が高騰しすぎると、今度は相場が下落に転じてゆく。閏七月十三日になると、「唐船ニ差出し先日来唐物大ニ相場下落、追々商光商内致し能相成可申趣也、乍去当時ニテハ大黄元直ニ売、ならし候へハ出来之見込、外物ハ格別ニも持合無之早春安直ノ節買入之品計故安心也○三月已来高直ニなり候てハ大黄ハ不及申外品とも唐物一向売不申、医者得意も和薬計売様ニなり候へき、和薬ニて俄ニ高直の品出来けしからぬ事」。つまり、閏七月にもなると唐物が大幅に下落した中で色川家では安心の状況であることと共に、三月以来高直になり大黄だけではなく唐物が一向に売れず、医者などの得意先も和薬ばかり売れるようになってしまい、今度は和薬が俄に高値のものが出来てしまった状況を

記している。輸入物（唐物）の薬種の高騰と下落、反対に和薬の一部の高騰である。

そして、数か月後の十二月二十三日には、唐船については、これまで沙汰がなく、多分欠年の見込であり、来年正月には俄に値上げされるのが間違いないと見越して、手持ちがあるにもかかわらず、春の仕入れ分として、江戸の片田屋・△△、富田屋三件に十斤宛の注文の書状を出している。つまり、価格の再高騰を見越した発注をしている。

以上が、「家事志」に記された大黄をめぐる薬種商の対応である。ここからは、大黄の価格高騰による周囲の慌ただしさと共に、色川家の薬種（特に大黄）の価格高騰への危惧と情報収集と仕入れに奔走する様子、先を見越した薬種の確保の姿が見える。先述の通り、大黄は使用頻度の高い薬種であり、届かない、或いは高値になることは薬種商にとっては大変な問題であっただろう。

唐物の中で、なぜ大黄の価格高騰の噂が流れ、価格が高騰・暴落と変動していったのか。当時の大坂の朝鮮人参に関して、この年に限らず高額のまま推移しているため²²、大黄のみの問題だったのかはわからない。しかし、いずれにせよ、輸入物の多い薬種を取り扱う薬種商にとっては、船が港に入津せず、薬種が届かないということは、大変な問題であった。

なお、この時期は、先述の表1「薬名帳」が作成された時期である。このような薬種確保に走る時代状況の中で、色川家は医師の需要に応えられるよう、充実した品を揃えた店として医師達にアピールしていたのかもしれない。

おわりに

本稿では、色川家の記録から薬種商の活動について、主に「薬種」の点から見た。色川家では、漢方薬種から蘭方薬種、中には民間薬的なものに至るまで多種多様な薬種を扱い、顧客へ販売していた。その一方で、売薬も販売していた。この形態は、江戸などの大店でも見られることであり、地域の薬種商も都市の薬種商と同様の経営を行っ

ていたことが窺える。

色川家が多様な薬種を取り揃えた背景はいくつか考えられるが、第一に、「家事志」が記された文政期から幕末期にかけての時代状況があっただろう。この時期は先述の通り、漢方医学の各流派が興隆し、村落部にも医師が増える時期であった。蘭方医学も都市を中心に蘭学塾が開学され、学ぶ医師も出てくる。当時は漢方医学の基礎の上に蘭方を学ぶ医師が多く、都市のみならず村落部でも、漢蘭の薬種が必要とされる時期となっていた。

次に、色川三中の本草学への興味関心である。国学・度量衡などの研究者でもあった三中は、生業の薬種商に関する医学・本草学についても非常に関心を持ち、薬方書『大同類聚方』の校合や、医学・本草書の収集や写本を常日頃行っていた⁽²³⁾。研究のみならず、外出先で薬種を採取・栽培し、知り合いから情報も得て、半夏や紅花などの栽培に成功、江戸の薬種商に出荷できる程になっていた。そして、その経営姿勢は、美年にも引き継がれていたのだろう。

さらに、薬種を調達できる状況もあった。色川家のある土浦は霞ヶ浦があり、又距離的にも海陸共に江戸との頻繁な交流が出来た。三中・美年の薬種商としての修行先は江戸であり、又、江戸の薬種商大店と日頃から交流し、必要に応じて薬種を手に入れることが出来た。これらの時代的な需要・薬種商としての意識・調達できる背景が重なり、安政期の表で見たような、江戸の薬種商に引けを取らない薬種を揃えていたと考えられる。「家事志」からは、文政・天保期に得意先が増え、薬種商として幕末期まで成長していく様子が描かれる。これらの品揃えと知識は、地域で活動する医師らの信頼を得る背景ともなり、色川家の薬種業経営の成長につながっていった可能性がある。

この色川家の状況が当時の全国的な薬種商の姿を現しているのかは、個々の薬種商に関する史料や研究がほぼないため、一般化は出来ない。むしろ、大都市のいくつもの薬種商大店と関係を持ち、本草学研究・栽培も行う三中の状況を考えれば、一地域の薬種商としては少し特殊であったとも考えられる。

本稿では、時代の流れの中の薬種商の行動も見た。天保改革期の中での薬種の値下げや、黒船来航時に薬種確保のために奔走する姿が時の政治・社会状況によって機敏に対応する薬種商の姿があった。薬種商は、医療者として医療を支える立場であると同時に、商人としての経営の側面をも持つ存在であった。それゆえに、同じ医療に携わる「医療者」とはいえど、医師とは全く異なる立場であり、医師よりも時の政治・経済・社会情勢にもろに影響された。この二つの例からは時代に影響されてゆく薬種商の姿が垣間見えるのである。

最後に、色川家の薬種業経営について本稿が取り上げた点は、あくまでもその一端に過ぎない。色川家の記録は膨大であり、これらの薬種が得意先に売られ、経営が拡大してゆく状況も見える。得意先への薬種販売と色川家の経営拡大などについては、また稿を改めて述べてゆきたい。

(謝辞) 本稿作成にあたり、土浦市立博物館学芸員木塚久仁子様および博物館スタッフの方々には大変お世話になりました。ここに、御礼申し上げます。

註

- (1) 「医制」に関しては、明治七年に内務省から発布されたのが始まりであるが、当初は東京・大阪・京都の三都市が対象であり、後に全国的な制度となった。
- (2) これらの研究については文献が複数あるが、代表的なものでは、吉岡信著『近世日本薬業史研究』薬事日報社、一九八九年。富山県編『富山県薬業史』資料集成上・下及び同通史、富山県、一九八三年・同八七年。野高宏之及び佐藤敏江編『道修町文書』近世編第一巻〜第七巻、道修町資料保存会、二〇一〇年〜二〇一九年等がある。
- (3) 中井信彦氏『色川三中の研究』伝記篇(塙書房、一九八八年)、同学問・思想篇(同、一九九三年)。及び土浦市立博物館第三六回特別展展示図録『次の世を読みとく―色川三中与幕末の常総』(土浦市立博物館編・発行、二〇一五年)、土浦市立

博物館市史編さん室編「家事志」「家事記」第一巻～第六巻（土浦市史資料、土浦市立博物館発行、二〇〇四年～二〇一四年）、等。拙稿「「家事志」「家事記」から見る江戸の薬種商と色川家」（『土浦市立博物館紀要』第三一号、土浦市立博物館、二〇一一年）

(4) 前掲拙稿二〇一二年。なお、前掲「家事志」「家事記」第一巻～第六巻各資料編にも、各巻で登場する店がまとめられている。

(5) 江戸の各商店の経営状況の変化については、註4参照

(6) 「家事志」二、文政十一年六月の巻末。なお、本稿本文中で引用する「家事志」「家事記」は、土浦市立博物館寄託色川徳治家文書の影印本である。

(7) 「家事志」一・二

(8) 土浦市立博物館寄託色川徳治家文書「葉名集」（安政元年三月）

(9) なお、帳面の中には「和漢大凡薬名荒増通用品記左」の文面があるが、実際には蘭方薬なども入っているため、和漢を中心とした色川家で扱う薬全般の帳面であると考えられる。

(10) 国文学研究資料館国文学研究資料館蔵「天保九歳戌七月相場 薬種相庭帳」近江屋小兵衛。江戸の薬種商のこのような記録も非常に少なく、貴重である。なお、江戸の薬種商の売薬については、文政七年版の『江戸買物独案内』（中川五郎左衛門編、山城屋佐兵衛ほか版、国立国会図書館デジタルコレクション）、「薬種」の欄に、江戸の町中の薬種商各店の看板商品である売薬の引き札が数多く載せられている。

(11) 「家事志」十一、天保七年六月二十二日・同六月二十四日

(12) なお、当時は、同名の売薬が様々な店で売られていた。又、色川三中は、その知識の多さから医師に教示し、治療も当てることもあった。

(13) 色川家の使用人を使つての経営拡大については、関東近世史研究会二〇一四年三月例会、土浦市立博物館二〇一五年特別展講演会などで以前取り上げている。

(14) 「家事志」六、天保二年十二月の後ろの附記

(15) 前掲拙稿、二〇一一年

(16) 土浦藩の天保改革および儉約令については、「家事志」第五巻解題に詳しい。

(17) 「家事志」十八、天保十三年四月二八日～六月八日。

- (18) 天保五年九月三日に「薬屋仲間参会あり、於木下也」とあり、土浦には薬種商仲間があった(「家事志」十)。
- (19) 前掲中井信彦氏『色川三中の研究』、及び中井信彦『片葉雜記 色川三中黒船風聞日記』(慶友社、一九八六年) 参照。
- (20) 「家事志」 廿五、嘉永七年二月二日～六日
- (21) 「家事志」 廿五、嘉永七年二月八日～閏七月および十二月
- (22) 財団法人三井文庫編『近世後期における主要物価の動態』(増補改訂) 財団法人東京大学出版会、一九八九年。なお、これによれば、大坂での上物の朝鮮人參の相場は、嘉永五年・六年・七年とでは一斤につき銀二二〇〇貫匁、髭人參の相場は同二、六〇〇貫匁で変わらない。
- (23) 色川美中の薬種への知識と知識欲については拙稿二〇一五参照。

How Did Local Medicine Merchants Act in Late Edo Period?

—From Inspecting the Irokawa Archives—

OSADA Naoko

Abstract This article aims to clarify about the works of medicine merchants who lived in the countryside of Japan in late Edo period. It was the time when medical science, medicines, and medical care made remarkable progress. Many doctors lived not only in the cities but also in smaller villages and towns. It has been studied about the well-known doctors, activities of the doctors in the villages, and medical development. However, there are few documents featuring the development of medicine. Nonetheless, the records kept by the Irokawa family who lived in the castle town of Tsuchiura in the Edo period might fill this gap.

In particular, the ninth generation of Irokawa Minaka succeeded the business as medicine merchant. Known as a local Japanese classical scholar Minaka studied medical science and herbalism. He left many documents in his diary on his works and medical herbs. One of the documents *Kajiki* shows us medical merchant's works in the Edo period. This document had been handed down to Minaka's younger brother Mitoshi the tenth generation of Irokawa.

From the Irokawa archives, the author clarified that the Irokawa family had treated many kinds of medical herbs as much as merchants in Edo period. And also, the author revealed that they had coped well with the change of political, economic and social situation from the two historical examples.

Having examined the Irokawa archives, the author found various sides of medical world in Japan in late Edo period.

Key words: late Edo period, medicine merchant, the Irokawa archives